

令和7年度 NISE西日本ブランチセミナーin 広島 (第1回庄原市特別支援教育研修会)

令和7年5月14日(水) 三次市福祉保健センター

広島県北部地域におけるインクルーシブ教育システムの推進に向けて、通常学級・特別支援学級等における支援の在り方を考えることを目的に、国立特別支援教育総合研究所が主催、三次市教育委員会と共催の研修会を実施しました。

【話題提供】

「児童一人一人の教育的ニーズを捉え、指導の充実を図るための校内体制づくりについて」

庄原市立総領小学校 教諭 高木 保彰



- ◆児童一人一人の教育的ニーズを適切に把握、共有し、指導の充実を図るために組織的に行っていることについて実践発表をした。
- ・小規模校である強みを生かし、全職員で児童と関わっている。毎週末の暮会で気付きを共有し、支援の確認をしている。
- ・授業研では「個のつまずきシート」を活用し、手立てを考え、実践している。授業後に手立てが効果的であったか振り返り、個別の指導計画にも反映させていく。

【講演】「多様な子供たちをどう理解するかー実態把握を超えてみえるものー」

広島大学D&I推進機構 教授 河合 紀宗



- ◆通常学級で困っている児童生徒の困難の特性、学校現場の実践、教師の“まなざし”のあり方について考えた。
- ・子供理解の出発点は、「どんな子なのだろう?」という関心や愛情から始まる。
- ・評価・観察ではなく、“わかりつづけようとする関係性”を大切にする必要がある。
- ・一人ひとりで苦手や困難の内容や程度が異なるため、「この方法さえあれば大丈夫」という一般的な指導法は存在しない。

【グループ協議】

協議の柱 ①授業づくりについて ②合理的配慮について



- ◆テーマに沿って自校での取組や課題の交流等を行った。多様な立場の人と交流することで、自身の指導の課題解決のヒントをつかむ。

【参加者の振り返りより】

- 単なる実態把握になってしまうのではなく、子供たちとの日々の関わりの中から見取ることの大切さを感じた。
- 子供たちの行動の根底に、どのような困り感があるのか、しっかりと捉えて指導にあたりたい。
- 子供たちの実態は変化していくものなので、継続的に子供たちに関わり、評価したり、アセスメント方法を検討したりしていくことが大切だと学んだ。
- 子供たちが多様になる中で、どのような支援や指導をしていけばよいか、見通しをもつことができた。